

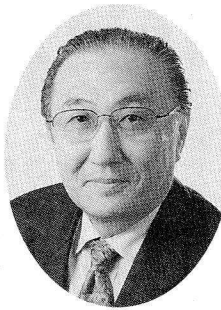
幽玄

題字 高秀秀信

横浜能楽連盟
会報 No.28

平成16年11月13日

連盟の活動を活発に



会長 新堀 豊彦

当連盟は昭和二十三年（一九四八）に創設されて以来、既に五十六年の歴史を持ち、主催する横浜能（現在は横浜能楽堂と共催）も今年で五十二回を数えます。能楽五流の素人の集まりとしては、全国を見渡しても類例のない実績と組織力を擁しています。これは各流派の絶大な御協力と横浜市民の御理解があったればこそその蓄積であり、また（横浜市と神奈川県）の文化賞受賞、能楽堂の建設への尽力など。

素人の会として、春（二月）の「五流交流の集い」と秋（九月）の「五流能楽大会」はすつ

理事会の報告

観世流 鈴木 力雄
常務理事

平成十六年度上半期の理事会は、総会資料原案を討議した三月を含め、四月、六月、九月の四回開催しました。そのうち例年の活動以外の主な事項は次の通りです。

一、総会資料（四月三十日 原案通り総会承認）

一 五十二回横浜能は、既定の宝生流「三井寺」のほか、梅若恭行師追善能「砦」の二日間興業とする。

二 副会長一名の増員が総会で承認され、会長、理事会の推薦で藤本氏に決まる。

三 役員改選期にあたり、金剛流望月、宝生流高橋、観世流阿閑の三氏が退任され、宝生流吉田、金剛流倉藤、観世流本戸の三氏が常務理事に、また、理事から常務に転じられた吉田氏の後任に小林氏が新任される。

二、第五十三回横浜能（十七年度予定）

横浜に住まれ、横浜における能楽普及に貢献され、さる六月六日逝去された田辺竹生師の功績を称えて追善能を行う。

平成十七年十一月二十三日

（水・祝）

田辺竹生師追善能「輪蔵」
平成十七年十一月二十六日（土）

金春流 桜間右陣師

「金沢狸々」

三、横浜能楽連盟規約の改正
現行の規約は施行後十六年を過ぎ、現状に合わない規約があることから、各流派から一名の委員による「規約改正検討委員会」を設置し、十月一日第一回委員会を開き、改正原案を年度内に取りまとめることとなる。

第二十回横浜五流能楽大会を終えて

冷夏の昨年とは逆に、記録的猛暑が何時まで続くかと案じられた今年の大会は、降り降らずのやや蒸し暑い日ではあったが、九月二十六日無事終了しました。準備段階では、個人会員、団体会員とも最多の観世流は、出演者の取りまとめ、番組構成などに時間がかかり、幹事流派にその都度ご迷惑をおかけしているが、今回は幹事流派として、開催案内から番組発送まで五ヶ月間を頂き、余裕をもった作業ができた。これが一因か、また、番組書式の統一を図る「横浜五流能楽大会・五流交流のつどい」流派別番組作成参考を策定したことに由来するものか、各流派の出演希望提出期限の遵守など

全く問題なく、順調に完了できました。

お蔭様で番組は、素謡十六番、連吟・独吟各二番、舞囃子一番、仕舞二十五番（十一組）、計四十六番、出演者数延べ約二百七十人と盛り沢山の構成となりました。

大会当日は、出演三十二団体のうち、申込時間に対し出演時間を超過したもの、申込時間丁度または余した団体が二十三分で、全体としては十七時三十分の予定時間に対して十七時三十分六分に終わったこと、また、忘れ物、履物の取り違いなどもなく、無事終了できたことは、会員各位のご協力のお陰と厚くお礼申し上げます。

なお、いつも言われることですが、切戸口や楽屋裏での出演待機の際は勿論、見所にあっても、出演者に対し私語の自粛などさらなる配慮を要するものと思われまふ。

当番流派（観世流）

鈴木 力雄

田辺竹生師を偲ぶ

連盟副会長 高岡 幸彦
観世流

田辺竹生師は嶋沢啓次師の内弟子として薫陶を受け準職分となられ、観世流の中核として活躍なされていたが、嶋沢啓次師

が亡くなられて後は亀山雅臣師、浜野金峰師、沖宗久師等と共に観世元昭師の同人となり、一生を通じて能楽界に貢献された誠に貴重な能楽師であった。

又、横浜の能楽界に於いてもその残された功績は実に偉大なものがある。今日の横浜能楽堂が出来たのも田辺竹生師がその口火をきられたのである。竹生師は横浜能の観世流の大御所であったが、常々横浜の人が年一回の横浜能を楽しむだけでなく、何時でも横浜で能が見られる様に横浜に能楽堂を作らなくてはならないという意見をもっておられた。それで横浜能楽堂建設の運動は田辺師を中心として、その門下生から始まった。先ず市に市民がどれだけ能楽堂の建設に関心をもっているか知らさなくてはならないと、昭和五十五年に田辺師自ら陣頭に立ち、一門揃って街頭で署名運動を行い、五万余人の署名を集め市に提出した。又、さきの戦争で戦火を免れた能楽堂は東京地区では多摩川能楽堂と染井能楽堂の二つだけであったが、その染井の能楽堂が解体となった時、その舞台等の廃材を譲り受け、伊藤文治師等と共に保管し横浜に能楽堂再建を志した。

現在の横浜能楽堂建設に当っては、部材のいたみも相当あり

補修、新替えも行われたが、鏡板だけは文化遺産として扱い、絵具の欠落も手を着けず使用されている。私共一門の者はこの鏡板に田辺竹生師の能楽堂建設の執念を感じる次第である。

又、人材の育成の面でも御子息の哲久さん、幼少の頃より面倒をみてこられた岡本房雄さんを観世元昭師の許に内弟子として派遣され、又、御両所も先生の期待にこたえて立派に修行を積み、今では国の重要無形文化財の総合指定を受けられた程の大物能楽師となられた。

又、門下生の中からも伊藤文治師、酒井純一郎師等育成され、御両所は現在能楽師として活躍しておられる。

以上は田辺竹生師の一生を通じての功績であるが、次に親しく教えを受けていた我々直弟子の思い出を記してみたい。

この様な大先生であったが、田辺竹生先生は大変くだけた面をもっておられた。お稽古の前には何時も世間話をされたが先生は話し上手でもあり、又、聞き上手でもあった。先生と話がはずむと一時間や二時間はすぐ過ぎてしまう。私の稽古日は月曜日で月曜日の夜はライオンズの会合日である。話が興に乗るとお稽古の時間がなくなってしまう事が間々あった。この様な

時、先生は「すまんすまん、この次はちゃんとやるから」と言われたが、私の方はお稽古より楽しかったと思うのが常だった。このお話が聞けなくなった事は大変淋しい事であるが、これは私だけでなく私と一緒に稽古を受けていた人達は皆同じ思いであると思う。

先生はお酒は一滴も飲まれなかったが大変な愛煙家であった。御家族も我々も何回か先生に煙草をやめて頂く様お願いしたが、「煙草をやめる位なら死んでしまった方がいいよ」と言われ、とりあつてもえなかった。

先生は若い頃軍隊で鍛えられた身体であり、煙草なかりせば肺癆等に侵されず、まだまだ御指導を受けられたと思うと残念でならない。

竹生島紀行

常務理事 三浦 重信
金春流

関西に旅するつど、米原から大津にかけて車窓に広がる琵琶湖を眺め、この奥に鎮まる竹生島を一度は訪ねたいと思つて、はからずもこの春かなうこととなった。

大阪からJR新快速で長浜まで一時間半、近くの港から高速連絡船で更に三十分の船旅である。本邦最大のこの湖の面積は

六百七十平方キロ、滋賀県全体の六分の一を占めるといわれるが、なるほど限りなく広い。改めて「近畿の水がめ」を実感する。

竹生島はその最北端に浮ぶ周囲二キロ、海拔二百メートルの小島である。仮に琵琶湖を径一尺の水盤に例えれば、この島は一個の粟つぶに過ぎない。

緑樹かげ沈んで魚木にのぼるけしきあり
月海上にうかんでは
うさぎも浪を走るか
面白の浦のけしきや

だがあいにくの湖北の三月は尚寒気がきびしく、冷雨はやまづ湖面には白波が立っていた。

出港して二十数分、前方に黒く丸い盆栽のような姿が浮かび、やがて濃い樹林に覆われた島に着岸。船着場から数軒の茶店を過ぎると、すぐに百六十八段の急勾配の石段にかかる。

息を切らしながら登りつめると高台が開け、目指す厳金山宝厳寺本堂、弁財天堂が在る。七百二十四年、聖武天皇の勅命により、行基の開基とされる。本尊弁財天は江ノ島、安芸の厳島と並び日本三弁財天の一つに数えられ、又西国三十三ヶ所観音霊場の第三十番札所である。それ、長浜からの乗船客二十数



宝厳寺本堂 弁財天堂 昭和17年再建

名の殆どが、白衣菅笠に木杖を持つ団体の信者たちであった。西国巡礼の起源は七世紀末、文武天皇にさかのぼるといわれる。衆生済度の志をもつてのこととはいえ千三百年前、遠界隔絶のこの孤島にまで霊場を開くとは、古人の信仰心の篤さにただ敬服のほかはない。

尤も、長い乱世の間には竹生島も含めて、諸国の霊場にかなり荒廃の時期があったことは推測に難くない。然しながら竹生島の寺社にとっては、近世豊臣秀吉、秀頼父子の存在は大きな意義を持つ。

千五百七十四年、織田信長により長浜に封ぜられた秀吉は、早速築城と城下町の形成にかか

り、神社仏閣の移築改修にも力を入れた。然も秀吉の熱心は、湖上を渡り竹生島にまで及んだのである。荒れた島内の堂宇再建にはおびただしい資材、労力と、時間を要したであろう。が秀吉の思いはその没後秀頼に引継がれ、秀頼は見事に遺志を遂行した。

弁財天堂の東側の石段を降りたところに建つ国宝の唐門は、重厚な唐破風の構えと内部の柱羽目に豪華な桃山様式の彫刻を飾る。続く観音堂もまた華麗な色彩によって、格天井に菊花、桐文、牡丹等が描かれている。ここから渡り廊下となり、これは秀吉のご座船「日本丸」の船櫓を利用したもので船廊下と呼ばれる。

続いて都久夫須麻神社に至る。この国宝の本殿はやはり正面に唐破風を持つ豪快な造りで、もとは宝厳寺の旧弁財天堂であった。その内部は要所に蒔絵を施し、格天井の六十からなる格間には四季の草花が極彩色で描かれ、襖絵と共に絢爛の一語につきよう。桃山後期、狩野光信の筆と伝わる。

上述の唐門、観音堂、船廊下及び神社本殿は、十七世紀初め秀頼が、秀吉の遺命に従い片桐且元を普請奉行として、京都東山の豊国廟の極楽門等を移築し

たものと考えられ、桃山様式を代表する貴重な建造物である。

大阪夏の陣に破れ豊臣氏滅亡後、秀吉の墓所豊国廟は徳川家康により破却された。従って廟の遺構が現存するのは竹生島のここを措いてほかにはない。こうしてみれば竹生島の姿自体が一つの歴史であり、その移り替りのうちに、神仏習合の美の象徴を見る思いがする。

月も日も波間に浮かぶ

竹生島

船に宝を積むこちして

花山法皇

~~~~~

「第一回 横浜大さん橋海遙能」  
公演を顧みて

喜多流 吉田 州男

今回、横浜港の施設であります横浜大さん橋ホールに観光客を呼べる新しい魅力づくりをしたいと考え、横浜開港一五〇周年記念事業「第一回 横浜大さん橋海遙能」を仕掛けましたが、能楽連盟の皆様をはじめ関係各位の強力なご支援のお陰をもちまして昼・夜二回の公演で約一八〇〇席が埋まり、新しい能楽ファンづくりを目指した企画は一応成功したといえるのではないかと安堵いたしております。もし、チケットが売れず、当日の天候が悪かったらなどと振り

返りますとき身の毛がよだつ思いであります。

横浜市には他都市に負けない文化施設が沢山ありますが、演劇・音楽会の公演などの催事にはあまり観客が集まらず、文化不毛の地だと言われており不安と同時に、何故なのか不思議に思っております。

しかし今回、初めて主催する側に立ち、関係諸機関をはじめ日本の伝統文化を支えておられます横浜能楽連盟、横浜能楽堂さらに他の文化団体の皆様にご協力を要請いたしましたところ、非常に好意的なご理解と暖かいご支援を頂き、あらためて横浜人の伝統文化に対する思い入れや情熱を感じその土壌の深さを知る良い機会となりました。

自分たちの住む街を「きれいな水と、緑におおわれた、生活に潤いをもたらし文化の香りが漂う街づくり」の実現を目指す私たちヨコハマ未来地図づくり一〇〇人委員会は、何としても

港に造られた巨大施設「横浜大さん橋ホール」という異次元の空間を生かした舞台を創造し、日本の伝統文化の粋であります「能楽」を見事に演出し、その素晴らしい幽玄の世界を市民の皆様様に堪能して頂きたいと真剣に取り組ましました。

当初友枝先生に横浜の能楽フ

ァンの開拓と私たち街づくりの会のためご出演を懇願してご諒解を頂き、後はスポンサー捜しとチケット販売に専念すれば何とかなると計算しておりました

が、三月中旬にスタートしました時点で開演まで三ヶ月しかなく、すべての作業に追っつけられてばかりで一息つく間もありませんでした。しかし、連盟会長の新堀豊彦様をはじめ横浜能楽堂会長・山崎有一郎様、友枝昭世先生門下生の横浜喜多会の方々まで親身になってチケットの販売から当日の受付業務などまでお手伝い頂きました。後日お礼にお伺い致しました折、山崎館長様から「素人は怖いなあ」と笑顔で言われましたが、唯々怖いもの知らずで走るのみでしたから結果オーライの感が強かったです。何はともあれ皆様方のご支援ご協力があつたればこそと深く感謝申し上げます。第でございます。

横浜開港一五〇周年記念事業として、すでに来年は七月二日(土)を目標に準備しております。二〇〇九年まで継続して開催する予定でございますので今後とも横浜の文化環境をより厚いものにするため、そして日本の伝統文化遺産であります「能楽」の普及を計るためにも会員皆様により一層のご支援ご協力を心

からお願い申し上げる次第でございます。

#### 宝生流トピックス

##### 横浜宝生流連合会 謡曲大会開催

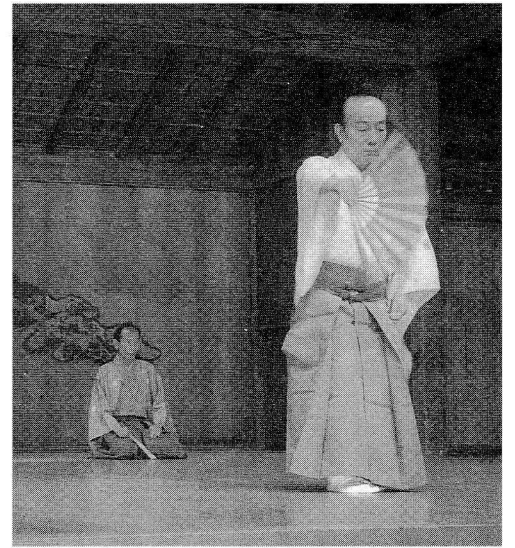
宝生流 小林美佐子

横浜宝生流連合会謡曲大会は、神奈川県内の宝生流謡曲を愛好する方々が一堂に会し、日頃の研鑽の成果を発表する場として長い歴史を誇っており、八月二十八日(土)横浜能楽堂本舞台において第十七回目の大会を開催いたしました。

この会の一番の特徴は、横浜に所縁のある職分の先生に毎回ご参加いただき、私たちが舞う仕舞の地を謡っていただいたり、又番外として仕舞を舞っていたり、私たちの研鑽のお手本としてくださることでしょうか。

高橋章先生、塚田光太郎先生、大坪喜美雄先生、前田親子先生と、いずれも現在の宝生流を支える重鎮をお招きしての会はとても充実したものになっており、お忙しい中、快くお引き受けていただいている先生方に感謝しています。

一般の方々にとって、先生方のお能を拝見する機会があつても仕舞を拝見できる機会は少な



仕舞「野宮」

披かれ、そのし  
っかりした舞と、  
愛らしさに大き  
な拍手が送られ  
会に花を添えて  
くれました。こ  
うした若い方が  
沢山育つてくれ  
ると嬉しいと思  
いますが、育て  
ていくのも私た  
ちの役目である  
と改めて責任を

感じています。

いと思いますので、多くの方々  
に先生方の貴重な仕舞鑑賞の場  
を提供することに、主催者とし  
て少し鼻を高くしているところ  
です。

次の特徴は、宝生流の謡曲・  
仕舞を愛好されている方の集ま  
りである連合会の会員と、教授  
嘱託会が連携して会を運営し、  
更に神奈川県内の各社中がこの  
日のために協力してくれるとい  
うことで、たいへん質の高い会  
が開催できているということだ  
す。

今年はいよいよ悪天候で、観  
客席が少し寂しかったことが残  
念でしたが、番組は仕舞二十番、  
素謡二十三番、番外仕舞四番、  
計四十七番で、延百五十名が出  
演いたしました。

この中で小学校四年生の安部  
喜美子さんが仕舞の「熊野」を

## 「節」と「言葉」

連盟副会長  
梅若会 堀内万紗子

息子が幼い時の昔のお話で  
ございます。

子供は皆、寝る前に必ずお話  
しをしてと申します。親は忙し  
い中、読み聞かせをするのは結  
構な大仕事です。今の時代は小  
さなカセットテープも利用でき  
ますが、その頃、幸いにも謡の  
お稽古用に大きな重たいオーブ  
ンリールがございました。それ

に二題づつ録音して、父親が今  
日のお当番、翌日は母親の私の  
番と「日本昔話し」をせっせと  
録音しました。

小一の始め受持の先生との面  
接で、「堀内君はよくお話しを  
してくれませんが今日は関西弁で、  
次回は関東弁で、巧みに使い分  
けてます」との事。改めてテー  
プを聞いてみました。なるほど  
「ふるやのもり」の調子、私は  
「ふる谷の森」と解釈しました。  
ところが「古屋の洩り」でした。  
ちなみに主人は紀州出身でござ  
いました。

前の時代より更にさかのぼり  
まして私の小学五年の折の事で  
ございますが、この時始めてお  
仕舞を習いました。こんな老人  
の趣味をと、祖母に申しました  
ところ、「お謡やお仕舞は扇一  
本でお友達とおつき合ひでき  
る」との意見でした。

最初にお稽古したのは「月宮  
殿の白衣の袂」の鶴亀でした。  
「君の齢も長生殿に」、私は「君  
の弱いののは盲腸のせい」と聞こ  
え信じてました。後に女学生に  
なった或る日、謡本を見て驚き  
ました。

いずれにしても印象強く例え  
て覚えるのも一案と存じます。

## 能楽堂より

十二月～三月の公演

横浜能楽堂では、次のとおり  
公演を開催いたします。

「企画公演 女による女のため  
の女の能」

十二月二十三日（木・祝）午後  
二時。新作能「小野浮舟」（観  
世流）津村聡子。S席三千七百  
円。A席三千二百円。B席二千  
七百元。梅若六郎と馬場あき子  
の対談も。三月に梅若能楽学院  
会館で東京公演。チケット発売  
中。

「普及公演」蠟燭能」

平成十七年二月二十六日（土）  
午後二時。狂言「不須」（和泉  
流）野村小三郎。能「清経」（宝  
生流）佐野由於。正面三千七百  
円、脇正面三千二百円、中正面  
・二階二千七百元。チケット発  
売は平成十七年一月二十二日  
（土）窓口で午後二時から。電  
話は午後二時三十分から。

「普及公演」

平成十七年三月二十一日（月・  
祝）午後二時。狂言「鎌腹」（大  
蔵流）山本泰太郎。能「安達原  
（観世流）武田宗和。正面三千  
七百元。脇正面三千二百円。中  
正面・二階二千七百元。平成十  
七年二月二十日（日）窓口で午  
後二時から、電話は午後二時三  
十分から。

お問い合わせ・お申し込みは、  
〇四五（二六三）三〇五五まで。

## 《編集後記》

幽玄の編集委員が次号より交  
代いたします。編集子（望月）  
は第10号より、（宝屋）は第15号  
より勤めてまいりました。この  
間に、平成8年の11号は横浜能  
楽堂開館特集号を、平成11年の  
15・16号は連盟50周年記念号と  
して、お能と横浜の記念出版、  
会員の演能四番等を取りあげま  
した。この年より横浜五流合同  
謡曲大会は横浜能楽大会となり、  
五流交流の集いが始まり、紙面  
を賑わすことになりました。21  
号からA4版に拡大しました。25  
号は横浜能五十回を記念し別  
刷りの特別号に、山崎有一郎館  
長の楽しく、意義深い講演を再  
録しました。

会員諸氏には永い間ご協力に  
感謝と、今後とも寄稿、ご愛読  
をお願い申し上げます。

（M・Y記）

## 横浜能楽連盟 連絡先

◎文書郵送又はFAXの場合  
〒233-0013 横浜港南区丸山台二丁目  
二九一七 新堀方  
FAX 〇四五―八四四―二九〇三  
◎電話の場合

横浜能楽堂 原田由布子  
TEL 〇四五―二六三―三〇五〇